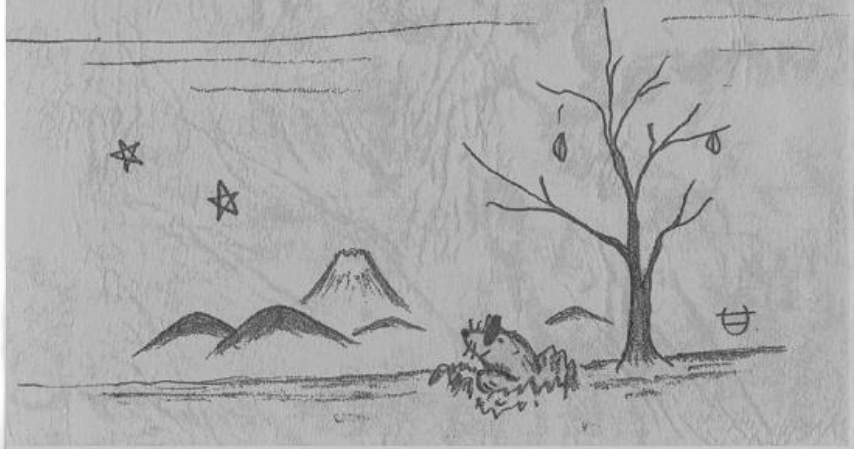
”富士見市の昔話・その六”

『モグラの旅路』

甘　十楽



『モグラの旅路』

甘　十楽

「川越の水田で、衰弱しきったオットセイが保護され、新河岸川を遡って来たに違いない事から”しんちゃん“と名付けられて、直ちに、飼育経験豊かな千葉・鴨川の水族館へと送られ、六ヶ月のリハビリを受けて、元気な身体をとり戻し、銚子沖へと放流された。しばらくは、舟の回りを泳ぎ廻り、頭をさげたり、ジャンプをしたり、名残り惜しそうにしていたが、飼育員さんにも促され、ようやく舟を離れ仲間の待つ沖へと向って行った。」と云う記事が、平成19年3月9日の新聞に載りました（巻末に記事転載）。

その節の飼育員さんによれば、リハビリ中にも、いろいろ会話をし、「しんちゃんは、何んだってあの川の奥までまぎれ込んじゃったんだい？」と聞いた事があったそうです。すると、しんちゃんは

「実は、我が家に伝わっている話で、ご先祖様のどなたかが、新河岸川を遡った、富士山もよく見える台地の、森の緑も美しく、湧水も豊かな所で生まれ。土を敬い、よく歌を読む、やさしい人間のお婆さんに育てられた、と云うんです。

そんな話を聞いて僕はどうしても、その川を探し、やさしいお婆さんに会って見たいと思うようになったのです。だから、まぎれ込んだのではなく、訪ね訪ねて遡ってみたんです。そして川も段々細くなり、食べ物もなくなり、身体も疲れきって、川から田んぼに上ったところを、丁度学校帰りの親切な子供に見つけてもらい、大人の人達に助けてもらった、というわけなんです」と話しました。他にもご先祖様にまつわる云い伝えを、聞かせてくれたりしましたし、放流の前の夜は、こんな歌を披露してもいきました。

"何処ぞや
新河岸川をのぼり来て
祖父の地訪ね
人情にぞ会う。"（しん）

さて、しんちゃんに伝えられた波瀾のお話とは？

春になると、土の中もなんとなく、ふっくらと、やわらかくなって来ます。そんな季に、モグラのモグローは生まれたのです。

回りは真暗だけど、お母さんのするように、まねして、前足で鼻先の土をかき分けると、穴が掘れて前へ進む事ができます。鼻先のおひげで方向もわかるし、餌をさがす事もできます。それに、この辺りは黒土で栄養も豊富なのでミミズや羽虫の幼虫等、モグロー達の好物に沢山行き当ります。巣穴のトンネルも結構長いし（富士見市史　四二頁参照）、それはそれなりに楽しい暮らしだな、と思っていました。が、二ヶ月もするとモグラは親から離れて独立しなければなりません。

モグローもお母さんから

「この先の北の方に、土の中なのにお水が流れている所があるわ、そこだけは流されると返って来られなくなるから、近づいちゃだめな

のよ。注意しとくわよ。それじゃ何かあったら連絡しなさいね、元気でねぇー」と云われて一匹立ちしました。

一匹になってみると、自由だし、元来〝知りたがり〟の性格だし、さびしさをまぎらわすためにも、あっちこっち動いてみたくて仕方がありません。今日は土の上へ出てみたくなりました。お母さんから

「お日様があたっている時は、体が乾き易いから気をつけるのよ」

とも言われていたので、土の表面の方の感じで、お日様が西に傾いた頃をみはからって、顔を出してみました。「うわーあ、すごい、こんな世界があるんだ」すぐ上には、大きな木が沢山の枝を張り、その先に緑の葉をいっぱいつけているし、西のお空は丁度夕焼けで真っ赤に染まっています。遠くに見えるお山は黒く並んで、その中にひときわ高くきれいな三角のお山があります。（後にお婆さんから富士山よ、

と教えてもらいました）東の方を見ると、キラリとひとつ大きなお星様が光り始めています。

モグローはうれしくてうれしくて仕方がなくなって、つい鼻歌が出て来てしまいました。

♪フン フフ フン・・・

一、穴堀り上手なモグラのモグロー
いつもまっくら土の中
だけどお目目は必要なのさ
それはね それはね
夕暮れ時にお顔を出して
赤い雲さん見るためさ
遠いお山を見るためさ

二、穴堀り上手なモグラのモグロー
いつもまっくら土の中
だけどお目目は必要なのさ
それはね それはね
月夜の晩にお顔を出して
キラキラ星さん見るためさ
まんまる月さん見るためさ
フフフフーン・・・・・♪

「わーあ、今まで知らなかったけどこんな素晴しい景色があるんだ。ようしこれからも怖がらずになんでも見てやろう。そういえばお母さんが、”行かないように“って云ってた水の流れってどんなんだろう。

見て置かなきゃ、話しにならないな。ようし明日はそこへ行ってみよう」。

一晩ゆっくり身体を休めると、楽しみにしていた朝になりました。

「返って来られなくなる。とかってお母さんが云ってたよな。ようし、それじゃお腹もいっぱいにして支度をしよう」と虫さんやミミズさんをあっちこっちさがして喰べて、少し北の方とか云う、水の流れをめざして、穴を堀り進みました。途中堅い土があったり、石ころを廻ったりしましたが、なんとなく土がじめじめし始め、その先に水の流れる音が聞こえて来ました。

ありました。行き着きました。そこは上の雑木林に降った雨が、黒い土にしみ通り、その下の堅い土が坂になっている所に集まって、水路のように流れていました。

「へーえ、きれいなお水じゃないか。それにこの流れに乗れば、水のすべり台のようで気持ちよさそうだよ。ようし」と云うと、チャポンと飛び込みました。（モグラさん達は土の中の生活でも、何日も雨が続く事もあるので、案外水も平気なのです）

「わーッ、気持ちいい、スリル満点ッ」

水の流れは早くなったり、ゆっくりになったり、左に曲がったり、右にぶつかったりして下って行きます。もちろん土の中ですから、まっ暗である事に変りはありません。

「ずい分下ったかなー」と少しの不安が浮んだ頃、先の方が少し明るさを感じたとたん、ブワーッと水と共に上に吹き出されました。そこは少し広めの、モグローなら五匹ぐらいはつかれる程の、水たまりになっています。

そしてモコモコッと、モグローの後から下って来た水を、吹き上げて来ます。そしてそこをあふれた水は、さらに土のくぼみの端を伝って流れ出て行きます。そうです、モグローが出たのは、崖の下の泉の湧き出し口だったのです。

泉の渕にはい上って見ると、お日様はぼんやりと雲がかかり、すでに西の方に傾き始めています。

確かにお母さんが云ったとおり、戻ろうと泉にとび込んで見ましたが、落ちて来る水に負けてしまい逆登る事は出来ません。

「いーや、こっちだって、おいしい虫さんはさがせるだろう」と地面の上を歩いてみました。住みなれた上の土とはとょっと勝手が違い、臭いも感じも初めてで、虫の一匹もつかまえられない内に、お腹がすいたのに加え、初めての緊張の疲れも出たのでしょう。田の畦でねむ

気におそわれ、ついうとうととしてしまいました。

「あーあ、こんなところで寝ていちゃ、ひからびちゃうよ。それに何時、カラスや、タヌキにつかまっちゃうかも知れやあしないよ」といって、両手ですくい上げてくれた人がいます。

下の畑の作業を終え、クワや鎌の道具を泉の溜りで洗って帰ろうとした、上の家のお婆さんです。

モグローも、モグラで云えば成人になるところで、もう十七センチ程になっていましたが、両手の中で眼を覚まし

「ありがとうございます。実は・・・・」と、今日の事を話しました。

「そうなのかい、私も家は坂の上だし、そっちにも畑はあるんだよ。これを洗ったら、つれて行ってあげようね」といって、ふところへ入

れてくれました。

「あったかーい」なんだかお母さんの事を思い出してしまいました。

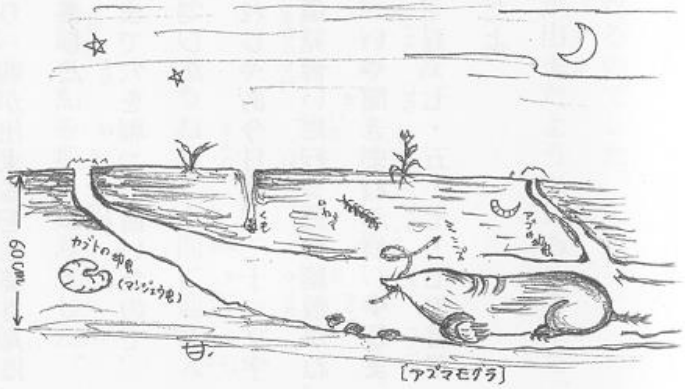
こうしてモグローは、坂の上のお婆さんの畑で暮らすようになったのです。

そこは前に暮らしていたところと土の質も同じだし、何よりも、お婆さんが

「土は神様なんだよ。そこで暮らすお前さんならわかるだろうけど、人間にとっても命を支えてくれる大切なものなんだよ。だから私は、毎朝畑に出ると最初に手を合せ〝今日もよろしくお願いします〟と拝んでから作業を始めるんだよ」と云っているように、土に感謝してから、まめにクワを入れたり、雑草をとったりと、手をかけているので、土もふっくらとし、モグローが住まわせてもらっても気持ちが良かっ

たし、昆虫の幼虫やミミズ等の大好物も沢山みつかるようになるのです。

さらに秋になった頃には、クヌギの木の下の近くに、落ち葉を集め、その上に古くなった藁や、莚をかけてくれて、葉が新しい土になるようにしてくれたので、そこにもミミズもわき、このあたりではマンジュウ虫とも云っていたカブト虫の幼虫まで住みつくようになり、モグローにとっては、素敵なお食事処のようにもなりました。



そして冬になると、農作業も少なくなり、暇が出来るとお婆さんは、縁側に座って書き物をする事が多くなりました。

そんな時のためにモグローも縁側の下まで穴を堀って置いたので、何回も出かけてはお話しをしてもらうのでした。

「あー、今日も来てくれたのかい。それじゃあ今日は、三十一文字のお話しをしようかね。私が娘の頃、行儀見習いに行ったお屋敷がね、歌会をやるお家でね、私も見よう見まね、いや聞きまねかね、少しまねをするようになったんだよ。それはね、五・七・五・七・七の言葉で物事の感情を伝えられるように読むんだよ。

例えば、

”もの言わぬ土はやさしくわが心
温くつつみて　癒しくれたり“（富美）

どうかね、モグラノお前さんにもわかるかねぇ。お前さんもいっしょに作ってみるかね」と優しく話してくれるのでした。

モグローも、なんだか人間の仲間入りが出来たような気もして来て、偉くなったような気分になりました。

冬の終りの頃には、大きな地震がありました。

モグラは、揺れ出すところ（震源）に近いのでよけいに怖いのです。巣穴のトンネルも全部くずれてふさがりました。急いで飛び出して、お婆さんの家にころがり込みました。

「おーおー怖かったろう。ここに一緒にいようね」と土間に迎え入れ

「ねー、お爺さんいいですよねー」とお爺さんを振り返りました。

「あーいいともさ、好きなだけ居りゃいいよ」、モグローはお爺さ

んと話すのは初めてだったけど、お婆さんと似た者夫婦のやさしい人で、藁を重ねてクッションにして、地震の動きをやわらげるようにして、モグローを乗せてくれました。そんな事もあってから春になりました。

春が来ると、農作業も増えてきます。ほうれん草や白菜、キャベツと云った葉の野菜も育ち始めます。それを喰い荒らす青虫達も動き始めます。モグローは

「日頃のご恩返しは今だ」とばかりに、朝も暗い内に、葉蔭にかくれている虫やナメクジ達を、せっせと退治しました。いやモグローにとっては、結構おいしい朝食なのでした。（モグラは食虫類と呼ばれて、虫は食べるが野菜は食べないのです）

お婆さんは

「今年の菜は、モグローのお蔭で食害もなくリッパにみずみずしくおいしく育って助かるよ。これなら人様への売り物にもなるねぇ。本当にありがとうね」と言ってくれて一首

”地下足袋を　春の畑にぬぎすてて
　土の温みを　たしかめて居る“（富美）

そしてまた一首

”地下足袋を　履けば心もしゃんとして
　老いたる吾の　今日が始まる“（富美）

モグローも、お婆さんの歌が浮んで来る事にも、少しは役立ったのかな、とうれしく思うのでした。

桜の花も散って夏のにおいがしだすと、モグローの中の”知りたが

り“の虫が蠢き始めました。どうしても、もう一度、あの泉の流れの先を見てみたくて仕方がなくなり、何晩か考えた末に、お婆さんに相談しました。

「お婆さん、お蔭様で楽しく豊かに暮らさせて頂いていますが、どうしても、あの泉の先の事が知りたくてしょうがないんです。行かせてもらってもいいでしょうか」お婆さんは「そうかい、モグローも若いんだし、あんたの一生だよ。やらないで後悔する事はないよ、思いっ切りやってごらん」と賛成してくれました。

出発の日にはまた一首

”いずくにか　根をおろすらん蒲公英の
　種子は立夏の　風に乗り行く“（富美）

と、たんぽぽになぞられて、別れを惜しんでくれました。

モグローもお別れなので

黒土と婆様の愛　忘れまじ
　たとえ流れる　雲となりても（モグ）

と返歌をしてみました。

泉からの流れに乗ってみると、すぐに江川という小川に注ぎ込みました。

そこでは、石の裏側や、水草についている虫を喰べる事をおぼえました。

「昔は水車が働いていたんだよ」とお婆さんが云っていたのはこのあたりかなー。と思っている内に、江川は、新河岸川という少し大きな流れに合流しました。

その川は、東京へ物資を運んだりする、舟運も盛んだった事もある川で、少しゆったりと流れているし、少し気持ちもゆったりして来たりして、鯉や鮒の幼魚やくちぼそ、それに小さなえびまで、つかまえるようになりました。小魚とはいえ泳ぐのは早いので、最初は得意の暗やみ作戦、そう、夜になって行動しました。そうしながら泳ぎも夢中になって練習しました。そこでしばらく暮らす内に、喰べる物も違って来たせいか、身体も大きくなって来たし、もともとビロード状だった体の毛も、さらにぬめりとひかりが増し、お腹もへこんで流線型になって来ました。さらに爪の長かった前足は、泳ぎ易いように少しずつ鰭型になってきて、後足はうしろに異動して来たような気がします。その後足をうしろへ伸ばすと、全体では五〇センチぐらいにはなったのではないでしょうか。

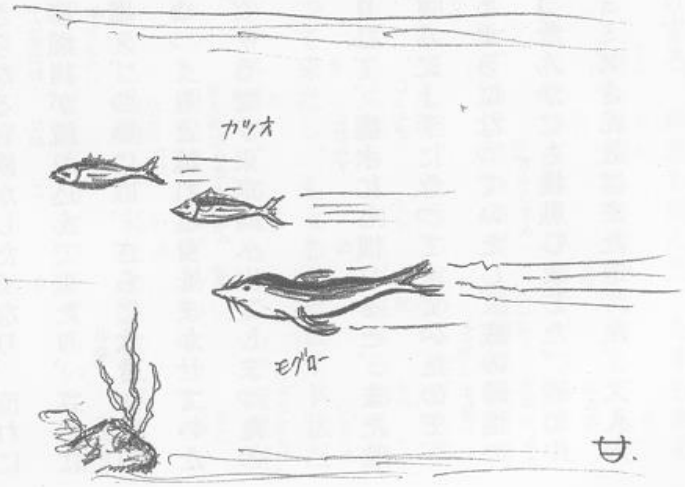
そこでの生活に慣れると、またさらなる冒険がしたくなり、流れに沿って下ってみました。志木では柳瀬川が流れ込んで来たり、さらに何本かの川を受け入れて、水量も増え、ついには、さらに大きな隅田川と云う大川に流れ込みました。ゆっくりと流れに身をまかせていたら、水は段々塩味がして来ました。そうです東京湾へ出てしまったのです。

海水と淡水の間を行ったり来たりして、塩水にも慣れると、また喰べ物が豊富になりました。泳ぎもさらに上手になって来ていたので、中型のイワシや小さなアジも追えるようになっていたし、底の砂地の方にいるアナゴの小さいのやシャコなんかにも挑戦しました。砂の中にいるゴカイも喰べてみました、ミミズさんとはまた違った、大人の味のようで好きになりました。

そこでも楽しい食生活をしましたので、身体はさらにたくましく流線型もするどくなり時々回遊してくるカツオさん達とも、泳ぎながら話しを聞くこともできるぐらい上達しました。

カツオさんが云うには、

「この湾の外には、もっと大きな海があるんだよ。そして僕達より大きなマグロなんかも泳いでくるし、そうそうとてつもなく大きくて、比べる事が出来



ないけど、クジラと云うのも泳いで来るんだよ」

それを聞いてモグローは

「ようし行ってみようじゃないか、見てみようじゃないか」とまた知りたがりの虫が全身を動きまわり、体調を整えた翌日、カツオに教わったとおり、来た方とは反対の南へ向って泳ぎ出しました。

しばらくは景色を楽しみながら泳ぎました。大きな船がすぐ脇をすれ違ってモグローの身体をゆさぶったりしました。

夜になりました。右手の黒々とした崖の上に、ぽつりと灯りがともっています。お船が安全に通れる目安になるための"灯台"と云うんだと、カツオさんが云ってたなーと思い出したりしました。

さらに南をめざしていると東の空が明るくなって、お日様が昇ろうとして来ました。

「キレイな朝だなあ」と眺めました。
今、気がついたんだけど、モグローの目は、開けるとクリクリッと黒目が光るように大きくなっていました。魚をつかまえるためにどんどん表へ出て来ていたのです。
急に暖かな早い流れが右側から来て、モグローはふわりとそれに乗せられ、北へと運ばれる事になりました。黒潮です。
「うわー楽ちん。泳がなくとも浮いてるだけで運んでくれるんだ。面白いな、気持ちいいな。」と故郷でも同じような事があったような気もしました。土の中の流れの事でしょうか。
しばらく流れていると、今度は北から来た冷たい流れ（親潮）とぶつかり、しぶきが上がるほどに交り合いました。潮目と云うそうです。
そこには小さなプランクトンと云う生き物が発生し、それを喰べよ

うと小魚が集り、またそれをねらって中型魚も集まります。モグローにとっては、すばらしい食事天国でした。好きなイワシにサンマなんかも喰べてしばらく、そのあたりで過ごすと、身体もさらに大きく一三〇センチ位にはなったようだし、後足はもうすっかり尾鰭のようになって、推進力にも、方向転換にも役立つようになっていました。
そんなある日、冷たい流れの方から
「こんにちは、私達もご馳走になっていいかしら」といって、同じような型をした生き物達が近寄って来ました。モグローも、親しみを感じて「どうぞ、どうぞ、僕だって旅の者です。ご一緒できればうれしいです」と迎えました。
こうして仲良くなったのは十頭程の一団で、北の海から餌を求めて南下して来た、オットセイさん達だったのです。

いっしょに楽しく過ごしている内、モグローの経験談等にも面白そうに耳を傾けてくれたりしました。またモグローはさらに大きく成長したりしていたので、リーダーに推されるようにもなりました。

季が過ぎて、オットセイさん達の故郷、北の海へと、いっしょに行って見る事にもなりました。

北海道を左にみて、さらに北上し、アリューシャン列島の、ひとつの小さな島に到達しました。

そこでお嫁さんもできて、子供に恵まれ、ついには孫達にも囲まれるようになりました。

そしてつれづれに孫達にせがまれ、〝黒土の台地で富士山をながめ、やさしいお婆さんに育ててもらった故里の事〟を目を細めてなつかしそうに話したりして、幸せな余生を送ったんだそうです。

そんな孫達の内の一頭に〝しんちゃん〟は生まれて来たのではないでしょうか。

終り

（あとがき）

この地にいっしょに住んでいたアズマモグラの事は、富士見市史（四二頁）を参考に。

オットセイの事は、朝日新聞の記事から想像し。

育ててくれたお婆さんについては、鶴馬二丁目にお住いで、土を敬い、農村歌人として歌集「土の韻」を残された、星野富美様を、ご子息、星野幸雄様のご了解を得て、モデルとさせて頂きました。

昔話　「モグラの旅路」

発　　行　2011年5月21日
著　　者　甘　十楽（あまみ　じゅうらく）
印刷・製本　志賀堂印刷

※筆者の甘 十楽氏の了承を得て
　同冊子をコピーして開示しております。

従って、作中の歌（富美）とあるのは「土の韻」より転用させて頂いたものです。

美しい郷土がいつまでも続く事を願って。

H19.3.9 朝日新聞（朝）

船を振り返る「しんちゃん」＝8日午後、千葉・銚子沖で、福留庸友撮影

しんちゃん 海へかえる

埼玉で保護

埼玉県川越市の水田で昨年9月に保護され、千葉県鴨川市の水族館「鴨川シーワールド」でリハビリをしていたキタオットセイの「しんちゃん」（オス、推定2～3歳）が8日、銚子沖へ放流された。捕獲当時は衰弱し、23キロほどだった体重も、今では倍。仲間の待つ海へ消えていった。

キタオットセイはこの時期、北太平洋から南下する。同水族館は2月中旬に南下を確認、放流を決めた。この日、午後0時半に銚子の東沖合約17キロで放流した。船の近くを泳ぎ回り、ジャンプするなどして、しばらく離れようとはしなかった。

新河岸川を昇って来たので「しんちゃん」と呼ばれていました。